

〈過去の他者〉を思いクヨクヨすること

沼田 あや子（本学教職研究科教授 臨床教育学、臨床発達心理学）

過去の恥ずかしい経験がふと思い出されたとき、意識していないのに「あー」とか「うわー」とか自動的に声が出てしまうことがあります。あの現象は、思い出したときの辛さを外に逃がすための心身の防衛反応であると、心理学では考えられています。このように、記憶は時間を超えて今の私たちを侵襲することがあります。年齢を重ねると記憶が薄れるかと思いきや、失敗経験はなぜかしっかりと蓄積され、「うわー」となることは減りません（失敗が多い私はとくに）。幸せな記憶も増えてはいくのですが、「あのとき私はどうすればよかったのか」という記憶の存在感が自分のなかで増していくのを感じます。つまり、クヨクヨすることがずっと続くのですが、そのクヨクヨは悪いものでもない気が最近しています。

失敗経験のなかでも、自分の言動で人を傷つけたかもしれないという経験は時間を超えて生々しく私のなかに残っています。自分の思慮の浅さから取ってしまった行動、感情が抑えられずに言ってしまった言葉が人を傷つけたことも多々あります。心理職として対人援助をするなかでの失敗も少なからずあります。私が心理職を始めたばかりの頃の話です。言葉の遅れがあった2歳の子が私との発達相談面接を3回ほど経て、病院を受診して療育を受けることになりました。最後の面接のお別れのときに私は「がんばってね」という言葉を発しました。そのときのお母さんの表情のこわばりは今でも鮮明に浮かびます。おそらく突き放されたように感じたのだと思います。それは私の不注意などではなく、ひと段落ついてホッとした気持ちの表れであり、ただの言葉の失敗ではありませんでした。

私は反省すべきですが、このような失敗に限っては、反省して専門職としての成長に生かすというのは、なんだか傲慢に響きます。なぜでしょうか。社会学者の大澤真幸が著書のなかで述べていた解釈は、迷う私のヒントになりました。

すでにいなくなった〈過去の他者〉に配慮すること、〈我々〉の現在につながりがあると見なしうる〈死者〉の願望や意志に敬意を払うなどして何ほどかの思いをもつことは、〈未来の他者〉に配慮するための一十分条件ではないが一必要条件なのではないか。

対人援助の場面で出会ってきた人のなかには、もう会うことのない人もいます。その人たちを〈過去の他者〉として、私は彼らにできることはあったのか、どうすればよかったのかという思いをもつことは、〈未来の他者〉を思うことである、と解釈できます。そこには「他者」がいるのです。「自分」の実践を反省して未来の「自分」に生かすというのが傲慢に思えるのは、目線が自分にしか向いていないからだ、私は思いました。

教育の専門職である私たちには常に省察が求められていますが、そこに他者は存在しているか、自分に問いかけたいと思います。広い意味での省察は、〈過去の他者〉を心に残して抱えながら、考え続けながら、生きていくことなのかもしれません。大澤が述べているように、そうすることで自然と〈未来の他者〉に視点を据えることができるような気がします。

自分のなかの他者は、直接かかわった他者だけに限りません。日本の8月は毎年〈過去の死者〉に触れることになります。外国の紛争地の他者に対して考えざるを得ない機会も増えています。自分の失敗の記憶だけではなく、時空を超えた他者の記憶に触れ、そのたびにクヨクヨしますが、私の実感として、そうすることで不確かな未来を見ようと目線を上げることができるような気がします。クヨクヨして前向きになるというのは、不思議なことですね。

【引用文献】大澤真幸『我々の死者と未来の他者 戦後日本人が失ったもの』インターナショナル新書 2024年